

# 国際教室における課題と実践(2年次)

山口市立平川小学校

## 1. 平川小学校の国際教室

本校には、現在7か国(インドネシア・アフガニスタン・モンゴル・ラオス・フィリピン・ベトナム・アメリカ合衆国)から来た外国人児童たちが在籍しているが、入国に伴う編入学と帰国が年間を通して繰り返されている。滞在期間によって児童支援のニーズが異なるため、ここでは日本語指導に加え、児童の生活指導、また帰国後につながる学力保障が必要となっている。

児童の指導は毎週各学級から出される週の学習予定に基づいて作成する独自の学習予定表をもとに行う。朝時間は、学級担任と日課変更有無の確認をするとともに、その日のどの時間に誰がどの児童支援に入るかを調整する作業から始まる。その上で、通訳支援者の割り振りの確認、保護者からのメール連絡の確認、QRコードを通した出欠・遅刻の確認をする。しかしながら、外国人児童たちは連絡なく欠席・遅刻することが少なくないため、家庭への連絡や必要に応じた家庭訪問も行っている。

## 2. 国際学校としての役割

外国人児童たちの文化や言語、宗教などの背景は様々で、それぞれの日本語能力や生活能力などの課題も様々である。こうしたことから、彼らの支援は多岐にわたる。しかし同時に彼らは生きた国際教育のための大切な人材である。この恵まれた環境を生かすため、本校で取り組んできたことの概要を記したい。

### (1) 保護者を講師にした総合的な学習の時間

外国人児童の保護者たちは、児童が生まれ育った国の生活や文化を知るための情報を多くもっている。そこで、6年生たちの総合的な学習の時間に探究活動の一環として関わっていただくことにした。保護者たちは本校の子どもたちにとっては大切な地域人材でもある。彼らの多くは母国の紹介に意欲的であり、プレゼン力も非常に高い。何よりもこちらのニーズにきちんと応えてくれることが素晴らしい。母国に対する愛国心の強さも感じた。

#### ① ラオスの話

ラオスから来ている児童の保護者は、ラオスの位置や人々の様子、日本人との肌の色の違い、ラオスの言葉、ラオスのお寺や観光名所、行事、ラオスの気候などについてのプレゼンをしてくれた。ラオスがGreen Countryと呼ばれるくらい緑豊かであること、山口市がラオスのように緑豊かで素敵な町であることも話してくれた。また全国で同様の義務教育を受けることができるという日本の教育環境の素晴らしさについても話してくれた。「教育が未来をつくる」という素敵なメッセージもいただいた。「日本で驚いたことは何ですか？」という子どもの質問に対し、「独居老人が多いこと」と答えられたことが印象的であった。ラオスでは、三世代が同居する文化が定着しているからとのことだった。



#### ② モンゴルの話

ドラマ「VIVANT」のロケ地にもなったモンゴルから来た児童の保護者は、国全体の遊牧民数の多さや、首都ウランバートルは標高が1,350mで最低気温がマイナス40℃になることもある「世界で最も寒い首都」であること、ビルがあるのは、ウランバートルだけで、モンゴル人たちのほとんどは広大な草原でのゲル住まいであることなど興味深い話をしてくれた。



### ③ インドネシアの話

インドネシアから来ている児童の保護者は、世界最大のムスリム人口を有する国家であるインドネシアが1万7千を超える島からなる国であること、300以上もの異なる民族がともに暮らす民族的多様性を持つ国であることなどを話してくれた。それぞれの島の人々の習慣・伝統文化も風土も、自然環境も多種多様で、島を渡ると違う国だと思えるくらいだと言う。その他に、インドネシアの文化である影絵やジャワのダンス、バチックの文化、インドネシアでは揚げナマズが人気であること、食事には右手を使う文化があり左利きの人も食事には右手を使うことなどを話してくれた。



### ③ フィリピンの話

フィリピンから来ている児童の保護者からは、7,641の島々からなる島国であるフィリピンでは、北と南の島では方言が大きく異なり、双方の言葉が通じないこともあることや、国旗の意味、竹の繊維で作られる伝統的な服やアドボやシニガンなどの代表的な料理、デザートとして有名なハロハロなどの話があった。一匹の豚を丸焼きにするレチョンの写真には子どもたちも驚いていた。フィリピンで人気の遊び「パティンテロ」や「ルクソン・トニク」も実演してくれ、子どもたちは興味津々であった。保護者からは「世界にはいろんな当たり前があることを知ってほしい。そして、世界に心を広げてほしい」という話があった。まさに国際教育の大事な視点である。



## (2) 地域の生徒をまじえた交流会

冬休みには、本校校区内にある平川中学校や西京高校の生徒も交えた交流会を開き、インドネシアから来ている他の児童の保護者に母国のプレゼンをしてもらった。

保護者は、どうして自分が山口市に来たのか、これまでの人生や山口市との出会い、日本とインドネシアとの違い、学校制度や人気のお菓子やインドネシアのコンビニの様子、インドネシアにおけるマンガ文化や日本食などの日本文化の浸透度などについて話してくれた。山口市の観光アンバサダーとして活躍する保護者ならではの興味深い話であった。



こうした交流を通して、子どもたちが「人を通して」外国を理解したり、互いの違いや共通点を見つけたりすることはとても有意義なことだと考える。身近に外国から来た友達や保護者の方々が多くいるという平川小の「当たり前」が「とても恵まれた環境であること」に気づいてくれた子も多かったと思われる。また、こうした交流は、「国際学校」である平川小を核としたコミュニティスクールの新たな形や、地域の教育力を生かした教育活動の可能性の提案にもなった。

## (3) 帰国児童とのオンライン交流

年度途中に母国に帰国した児童たちと本校の子どもたちとのオンライン交流を行った。

### ① バングラデシュ児童との交流1

帰国した5年生児童は、首都ダッカに住み自宅マンションから交流会に参加してくれた。バングラデシュの休日は金曜日と土曜日であるため、交流会は金曜日に行っ



た。彼女の学校（女子校）は10階建てのビルで、ダッカに5つのキャンパスがあり、5つのキャンパス合わせて約33,000人の生徒がいるという。彼女の通う本校だけで生徒数は約7,000人。山口県内で最大規模の平川小の子どもたちもこの人数にとっても驚いていた。

Bangladeshは安全でないので、一人で外を歩くことができないため、いつも車で登下校をしていることや、交通ルールを守らない運転手が多く、道路がとても危険であることなど、日本に住んだ経験のある彼女ならではの Bangladesh の感想を語ってくれた。

## ② Bangladesh 児童との交流2

同じく首都ダッカに住む児童との交流である。 Bangladesh には日本のような公園がないため、ほとんど家の中で遊んでいることや家では Bangladesh の本に加え、日本語の本も読んでいて、それは日本語を忘れないようにするためであることなどを話してくれた。

また、家の周りに多くの車が走っていること、さらにその車のほとんどは交通ルールを守らないことなど、日本がいかに安全な国だったかも伝えていた。

彼女は母国のいろいろな料理についても紹介してくれた。異国の食べ物に子どもたちも興味津々であった。交流会の最後には、みんなで「世界がひとつになるまで」を歌い、 Bangladesh 語で「ドンノバード」と言うお別れの挨拶をした。



## ③ ネパール児童との交流

5年生クラスに在籍し、ネパールに帰国した児童である。彼女も他の2人の児童と同様に日本を去ることをとても寂しがり、母国に帰国した後も日本に帰りたがっており、今回の交流をとっても楽しみにしていた。交流の開始は午前9時すぎであったが、オンラインで画面に出てきた児童の背景は真っ暗。現地時間では午前6時すぎだったからである。子どもたちは時差を実感したようだ。

ネパールの児童は、本校の子どもたちの質問に答えながら、自分が通っている学校が16年生まであってクラスの人数が37名であることや、交流当日の気温が28度であること（日本は真冬）、ネパールでのおすすめの場所がヒマラヤであること、日本から持ち帰った海苔を使って作るおむすびが大好物であることなどを話してくれた。また、子どもたちからのリクエストに応じて家の外の様子も見せてくれた。

交流会の最後には、彼女が大好きだった日本の歌「花は咲く」をみんなで歌った。ネパール人児童が感動している様子が画面から伝わってきた。これも温かくて素敵な交流会となった。



## 3. ネットワーク構築と実践

### (1) 外国ルーツのこども支援ネットワーク会議

県内でも増加傾向にある外国にルーツのある子どもたちの支援は、様々な課題を抱えている。そして、学校教育の中だけで、外国ルーツの子どもたちを社会とつなげることや、彼らの生活支援を行うことには限界があり、子どもたちへのよりよい支援を期待し、令和4年度に発足したのがこのネットワーク会議である。市内で最も多く外国ルーツの子どもたちが在籍する本校国際教室担当教員と市内在住の外国人支援を行っている「ひらかわ風の会」の事務局長が発起人として、市民活動団体や大学、行政



を含めた関係機関にネットワーク構築を呼びかけたことによりこの会議は始まった。

現在は、約3か月に1度のペースで会議を開催し、学校現場における外国人児童教育の現状や課題を踏まえ、外国人児童教育に関わる団体等がどのような形でよりよい支援をすることができるかを情報交換を交えて話し合っている。様々な外国人児童教育に関わる諸団体が連携することにより、これまで様々な立場で外国ルーツの子どもたちに関わっていた参加者が外国人児童教育の実態についてより深く理解し、同じベクトルで彼らの教育支援や生活支援を行うことが可能になると考えている。

## (2) 外国ルーツの子ども支援研修会

ネットワーク会議の中で出たアイデアを基に、有志のメンバーが実行委員会となり企画した研修会である。今回の研修会は、教職員や学習ボランティアといった外国ルーツの児童生徒を支援する関係者を対象に、支援の質の向上及び支援者同士の交流を目的としたものである。研修会を通して支援者が必要な知識を得ると同時に、多様な立場の支援者をつながることで、当該児童生徒により質の高い支援を提供することができるという考えをもとに内容を考えた。



研修会開催にあたってのシステムを整えるため、「外国ルーツの子ども支援実行委員会」を立ち上げ、「山口県新たな時代の人づくり推進ネットワーク」にも団体登録した。併せて会則も作成した。

研修会は、8月22日に山口県立大学で開催した。日本語指導に関わる教員や団体、大学職員など50名以上が参加、さらに14名がオンライン参加するという研修会では、日本語指導における実践や課題についての報告、ムスリム児童が食べることができるお菓子探しを通して異文化理解、それぞれの立場ごとの分科交流会などが行われた。本校の外国人保護者5名と児童4名もゲストとして参加し、大変盛況に終わった。



の報告、ムスリム児童が食べることができるお菓子探しの活動を通じた異文化理解、それぞれの立場ごとの分科交流会などが行われた。本校の外国人保護者5名と児童4名もゲストとして参加し、大変盛況に終わった。

## 4. オンライン日本語指導

県立大学の学生による外国人児童対象のオンライン指導である。本校児童2名が参加したこの学習をもとに、今後の日本語指導の在り方を考えることもできた。例えば、視覚からの情報に多くを頼る外国人児童のための指導の工夫、文字と音をつなぐ方法、分かりやすい発話の工夫、キーセンテンスの提示による不安感の払拭、児童にとって身近な話題を取り上げることの大切さ、教えたいことと学びたいこととのバランス、児童の発話の価値付け方、「単語レベル」から「文レベル」への移行、学習者の語彙に寄り添った支援、児童にとって身近で汎用性の高いものからのインプット、生活場面での混同しやすい言葉などである。

しかしながら、せっかく積み上げた日本語力も、帰宅後の母語環境、本人の意欲が高くないこと、また児童の特性上の問題等により、順調に向上することがなかなかできないことが生じることがある。こうした課題と日々向き合っているが日本語指導の実情である。

## 5. 次年度に向けて

4月に本校に入学する外国人児童は8名。他に編入学する児童も予定されており、我々は新たな課題と対面することになるだろう。毎日が国際理解。この環境をしっかりと生かし、本校ならではの国際教育の実践を積んでいきたい。